

## 目次

序章	貨幣の非対称性……………	1
	1 合算できない貨幣たち／2 手渡される貨幣の論理／3 還らない貨幣／4 多元的貨幣論へ	
第一章	越境する回路——紅海のマリア・テレジア銀貨……………	21
	1 マリア・テレジア銀貨の謎／2 英仏伊白による鑄造競争／3 銀貨流通の実態／4 回路としての貨幣／5 マリア・テレジア銀貨が語る貨幣論	
第二章	貨幣システムの世界史……………	55
	1 見えざる合意／2 地域流動性と支払協同体／3 銅貨の世界と金銀貨の世界——手交貨幣の二極面／4 分水嶺としての一三世紀／5 本位貨幣制と世界経済システム	
第三章	競存する貨幣たち——一八世紀末ベンガル、そして中国……………	85
	1 錯綜する貨幣／2 超零細額面貨幣、貝貨の世界／3 競存	

する銀貨／4 市場の重層性と通貨の競存／5 銀流入はインド・中国に何をもたらしたのか

第四章 中国貨幣の世界——画一性と多様性の均衡構造……………109

1 時代を超越する枠組——「土銭」・「郷価」の世界／2 銅銭経済の論理／3 二つの紙製通貨——鈔と票／4 上下「不」通の構造——秤量銀制度創出の動機／5 自律的個別性と他律的画一性

第五章 海を越えた銅銭——環シナ海銭貨共同体とその解体……………139

1 ジャワの万曆通宝／2 中国における基準銭／3 中世日本における基準銭の形成とその消失／4 中世日本における銭貨流通の特質／5 東南アジアにおける銭貨流通／6 環シナ海銭貨共同体の遠近

第六章 社会制度、市場、そして貨幣——地域流動性の比較史……………175

1 貨幣と制度的枠組／2 自己組織化された地域流動性——伝統中国における小農と市場町／3 地域流動性の他律的調整——絶対王政期以前の西欧／4 地域流動性の座標／5 地域的信用と地方銀行／6 伝統市場の四類型

第七章	本位制の勝利——埋没する地域流動性	211
	1 一国一通貨原則の歴史性／2 小農経済と在来通貨の変容 ／3 紙幣と兌換性／4 脱現地通貨化と恐慌	
終章	市場の非対称性	229
	1 貨幣需要の季節性と通貨の非還流性／2 「財の交換」と 「時の交換」／3 市場階層の不整合／4 市場の水平的連鎖と 垂直的統合	
補論	東アジア貨幣史の中の中世後期日本	255
	1 常識の非「常識」／2 明代私鑄の北宋銭、開元銭、そして 永楽銭／3 階層化する環シナ海の銭貨——悪貨は良貨を駆 逐せず／4 分岐する近世東アジア	
	あとがき	293
	増補新版あとがき	299
	岩波現代文庫版あとがき	311
	注 23	
	参考文献 1	



## 序章 貨幣の非対称性

### 1 合算できない貨幣たち

交易というものは対称的な行いであるはずである。花子と太郎がいて、二人が交易をするということは、花子から太郎へ手渡すものと、太郎から花子へ渡されるものとは、釣り合った評価をされているものだ、われわれは考える。花子が太郎へある財を売ったとき、太郎が花子に代価として一万円札一枚を渡そうとしたのに対し、もし花子が一〇〇円硬貨七〇枚を要求したとしたら、よほど奇妙なことと映るであろう。

二〇世紀はじめの中国の揚子江中流域についてのある報告は、つぎのような記事を載せている。この地域の農民は、自分たちの生産物を売却するときに、買い手である商人が当時の相場で銅銭一三〇〇文相当の一元<sup>げん</sup>銀貨一枚を渡そうとすると、銅貨で一〇〇〇文を要求するというのである (Imperial Maritime Customs, 1912, p. 283)。これは、右の花子を農民に、太郎を商人に置き換えると、はなはだ似た印象をあたえる構図である。

この場合、商人の方には銅貨と銀貨の両方が出入しているようだが、農民はどうやら

銅貨使用に親しんでいるようだ。一元銀貨一枚が銅貨一三〇〇文に相当するというのは、両替商などが交換するときの比率であろうが、農民からは、その銀貨は一〇〇〇文より低い評価しか与えられていないわけである。

すなわち、これは、二つの通貨の間の交換比率設定において、複数の評価が併存するからこそ起る現象である。<sup>(1)</sup>このように、交易の当事者たちが異なる通貨比率を想定している場合、二つの通貨の交換は双方向に対称的な行いとはなりえない。

本来、貨幣とは交易に对称性を与えるための存在であるはずだ。たとえば、五キロの米と一本のワインの交換が対称的である、つまり双方向に等価であるということ、二〇〇〇円の通貨が介在することで当事者は承認しあえる。もし、その通貨自体に対する評価が多元的であるなら、交易のよりどころがなくなってしまうようにみえる。

複数の通貨があつて、それらの間の評価が多元的であるということは、通貨の総量を測ることに意味がないということである。かりに農民と商人が集うある地方市場に、銀貨一〇〇元と銅貨七万文が存するとする。そこで、さきほどの一元銀貨一枚⇨銅貨一三〇〇文という相場にみなが依存しているなら、その時点でのその市場の通貨総量は二〇万文相当とみなすことができる。通貨の種類が二つだけだろうが、三つ四つあるいはそれ以上あるうとも、同じように合算することができる。通貨の間の相場が日々変動しても、合算できるという点においては、何も変わりはない。通貨総量の数値そのものは、

比率の変動によって増減するけれども。だが、相場が単なる両替商にとつての両替比率にすぎず、その市場で交易するものたちからの依存度が低いのであれば、通貨総量なしは市場の流動性などというものを測ることはおよそ空しい行為となる。

複数の通貨があつて、それらを合算することができないということは、ある通貨に不足が生じた時に、他の通貨で代替することが容易ではないということに通ずる。たとえば、農産物が豊作でかつ買い手がつくとき、その取引需要の増大に応じて通貨供給を増加してやる必要が生じるが、その時、当該の地方市場の外から銀貨を持ち込んでも、買手の思うようには購買はすすまない。農民たちの手元に、銀貨一〇枚と、銅貨一万三〇〇〇文のどちらを運びこむかは、両替商相場で換算するとどちらでも同じことなのだ。が、農産物の買い付けということに関するかぎり、まったく異なる効果をもつことになる。

さらに、通貨の間で代替性が乏しいということは、ある通貨の供給の増加が物価全般の上昇には必ずしもつながらず、またその減少も物価下落をもたらすとはかぎらないということにもなる。貨幣量の増減と物価の上下との間を正の一次式でとらえる貨幣数量説などは、およそ頼りにならない場なのである。

われわれの常識には、通貨を合算して貨幣総量を測れる世界の方が当然なじむ。だがじつは、貨幣の歴史というものは、この非対称的な事象に彩られていたのである。これ

から本書でしめすように、人類史全体を見回すと、この非対称性が実際、かなり派手に振る舞っていたといえる。にもかかわらず、着目されてこなかったのは、ひとえに観察する側が説明する論理をもてなかったがためである。実際のところ、交易に対称性をあたえるはずのものが、実はそれ自身非対称であるなどということを考え出すと、落ち着きが悪いこと甚だしい。だが、その座り心地の悪さをいとわず、貨幣の非対称性そのものに説明を与えてみるのが本書の目的である。

そもそも、なぜ通貨に複数の評価関係が成り立つのか。そこに問題を解く鍵がある。

## 2 手渡される貨幣の論理

今日のように、預金口座間の振り替えで購買や支払が行われる預金貨幣が重きをなす以前においては、貨幣といえば人の手から人の手へと渡される手交しやうhand-to-hand貨幣であった。ところが手交貨幣であるということそのものは、貨幣論ではほとんど問題とされてこなかった。<sup>(2)</sup>だが本書においてこのことはきわめて重要な意味をもつ。物理的に移動する、ことに拡散するということと、通貨間の多元的評価、すなわち非対称性との間に関係があると考えるからである。

実体をとまなう手交貨幣は、預金貨幣にはない、二つの特質をもつ。第一に、実体そのものに価値がある場合(紙幣のようにほとんど無視してよい場合もある)、その銀なり



銅なりの素材価値の変動から独立して、中立的に媒介機能を果たすことが容易ではないという点である。このことはこれまででもよく説かれてきたことである。<sup>(3)</sup>もう一つは、貨幣は循環するものであり還流すべきものであるのに、実体をもつ手交貨幣は、散布されたものが回収されるとはかぎらない、すなわち還流が保証されていないという点で不完全なのである。後者の方はあまり着目されてこなかったが、この「手交貨幣は必ずしも還流しない」ということが、本書では核心的な命題となる。預金貨幣の場合は、物理的には何も動かず、口座間で数値が相殺されるだけである。

「還流しない」などといわれても、にわかには納得しがたいかもしれない。たとえば個々の農民をとってみると、彼らが生産物を売却して得た手交貨幣は、やがて納税や消費物資購買を通じて手放すであろうから、収支はそろわずであり、還流しないなどというのはいえぬのではないかと。だが、ある市場に参加する人々の収と支が、ある期間をとってみると合致するということが、その市場が必要とするだけの通貨が物理的に還流することとは同じではない。市場の取引規模には増減の波があるからであり、また通貨の物理的還流には時間がかかるからである。高まった取引需要に応えるべく新規の通貨を投入することができる条件があれば、その市場は、散在する通貨が還流するのを待たなくてよい。そしてこのことが繰り返されると、還流しない通貨がどうしても生じてくる。

このように手交貨幣には預金貨幣と峻別されるべき特質があるのだが、同じく実体をともなつてはいても、商品貨幣ともやはり大きな違いがある。これから本書でしばしば例示するように、穀物は古今東西において、ことに農村市場において事実上の貨幣としての媒介機能を果たした。一八世紀まではかなり広汎に広がっていたと推測される。もろもろの財の中でも誰もが必要とするものであり、それゆえに最も販売可能性の<sup>(4)</sup>高い財といえるであろうから、穀物が生産者にとって身近な農村市場を中心に媒介機能を果たしたのは当然のことであつた。だがこのことは合理的なようであると同時に不合理でもあつた。かさばるとか、計量の手間とかのことではない。それだけなら、手交貨幣の範疇に属する超零細額面の<sup>(5)</sup>貝貨を(第三章)、商品貨幣の穀物と比べてみて、どちらが非効率かにわかには判断できないであろう。

問題は、最も必要な消費財に媒介機能を託すと、その需給が逼迫したとき、市場での交換全般を麻痺させてしまうという点である。飢饉が起きたとき、穀物の販売可能性は飛躍的に高まるが、同時に誰も売りに出さないので、市場は売買が成り立たず、混乱を助長させかねない。また貨幣機能を果たすがゆえに、その財を本来の長期需要予測を越えて過剰に保蔵してしまう傾向も生じさせてしまう。植民地期の東アフリカでは、家畜を貨幣として使用する慣行があつたため、どうしても家畜を過剰保持する傾向があり、生産活動に否定的に作用したともいわれている(Einzig, 1966, p. 506)。

歴史上ある程度普及した手交貨幣は、そうした商品貨幣とは異なつて、それが媒介する諸財の生産や需給に対して中立的たりえたものばかりである。米の過剰保蔵は実体経済に影響を及ぼさざるをえないが、貝貨の場合は直接的な影響はほとんどないといつてよいであろう。第四章でふれられるように、中国などで鉄製通貨が登場することはあつたものの長続きしなかつたのは、銅貨より腐食しやすいといつた物性もさることながら、鉄そのものへの実需が強すぎて、他の財に対して媒介機能を果たすことが難しかったという理由もあつたであろう。実際、鉄銭が溶かされるといふ事態も起きている(二一八頁)。

穀物を代表とする商品貨幣の場合、それ自体の消費によりやがて流通から退出するのに対し、それ自体の消費がまれない手交貨幣は、半永久的に流通することになる<sup>5)</sup>。しかも必ずしも還流せず、通貨ごとに独自で多様な軌跡を描くことになる。本書が手交貨幣にことさらに着目するのは、まさしくこの点にある。その流通と滞留のありかたの差に、通貨の間の評価を多元化させる原因がある。ことに、還流のしやすさと、額面の大小とは対応関係がある。具体的史実は、これからおりおりふれられるが、零細額面の通貨ほど還流しにくい傾向にあることを明白にしめす。とりあえず、物理的に拡散する度合いが大きい零細額面通貨ほど還流の速度に劣る、とだけ指摘しておこう。

### 3 還らない貨幣

銀行預金などというものがなく、手交貨幣が支配的な伝統社会において、ある一枚の通貨の軌跡を追跡してみたでしょう。どこかの中心的都市で発行された通貨は、そのままその都市内をずっと循環するものもあるうが、ある部分は地方の市場町へ運ばれ、さらに農村の定期市へともたらされるだろう。そこで自己の余剰生産物を売りにきた農民とともに彼らの家を訪れ、あるものは持ち主とともに定期市へまた戻るかもしれないが、なかにはながらく家のどこかに貯められてしまうものもあるにちがいない。

では、そうして「箆筒預金」の構成物となった通貨は、ふたたび逆の経路をたどって発行された都市に舞い戻ることはあるのだろうか。なかには、納税などを通して、そうした幸運にあずかるものもあるかもしれない。だが、あまり戻らないのではないかと、と直感する読者も多いだろう。しかし、その戻りにくさをどう説明したらよいのだろう。二つの要因が考えられる。

ここまでは、「ある一枚の通貨」とだけ仮定し、額面などの特定はしていない。だが、発行される通貨の間に額面の大小の差があった場合、中心都市から農民の「箆筒」にまでの長旅を敢行した通貨は、途中でその旅程をやめたしまった通貨と比べて、より零細額面のものである確率は高い。なぜなら、都市よりも市場町、市場町よりも定期市の方が、小規模取引の割合が増えるからである。取引によって通貨が、都市から農村市場へ

下向していくとき、下向するにつれて零細額面通貨の比率が高くなる可能性は高い。ところが、同じ規模の取引によって、通貨が農村市場から上向するときは、その零細額面通貨が戻るよりは、高額面の通貨に置換される度合いが強くなる。なぜか。まず、上位の市場ほど零細額面通貨の需要が低いこと。そして、零細額面通貨を集め、そして運搬する費用は、高額面のそれに比べて高いことである。需要が小さいのに費用をかけて零細額面通貨を上向させる動機は存在しない。

だが、第二章、第四章でみるように、一六世紀までの中国の場合など、実質的に人々が手にするのはモノユニット、中国の場合一文銅錢ほとんど一種類だけの場合もあるから、右のような市場階層の上下と額面の大小を対応させる説明だけでは不十分である。

市場階層の上下と対応し、そしてより重要な要因がもう一つある。さきほど、手交貨幣が十全には還流しえないことを、貨幣需要の増減の波をもってすでに説明した。この増減は、ことに農業社会において、避けるべくもない。収穫後に多くの取引が集中し、収穫前に向けて取引がまねになっていく、という季節性が生じるのは、必然である。だがこの貨幣需要の季節性も、ある社会全般に一樣にあらわれるわけではない。やはり都市から農村市場へと下向していくにつれて、その季節性は強くなり、繁忙期と閑散期の間の振幅は大きく、また高需要の時期が偏在する度合いも高くなると考えられうる。

貨幣需要の季節性が弱くて繁閑の振幅が小さい市場よりも、季節性が強くて振幅の

大きい市場における方が、より多くの手交貨幣を待機させようとする傾向がある。

これが、本書において、これから主張することごとのもつとも基礎にある命題である。すでに述べたように、本書は貨幣数量説の有効性はきわめてかぎられているとみなしている。だが説明を容易にするために、あえてその文脈にしたがえば、次のように表現することができる。貨幣数量説「 $M$ (貨幣量)・ $V$ (流通速度)  $\parallel$   $P$ (価格)・ $T$ (商品量)」における $V$ は、現実の市場、ことに伝統市場について考えるならば、速さというよりも、むしろ滞りにくさとみなされるべきである、すなわち、需要の振幅が大きく偏在度が強いために保蔵されてしまう性向の、その逆数であると。

この命題にしたがうと、中心的都市から市場町、そして定期市へと下向するにつれて、収穫期によつてもたらされる貨幣需要の季節性がより強くなるから、手交貨幣はそれに応じて下向するほど上位市場には還流しにくくなる。

そしてもし、第一の要因において、小額面通貨がよく発行されていて、かつ第二の要因において、農村の市場がよく発達している、という双方の条件を重ねもっている社会があれば、そこは通貨が下位市場により滞留しやすい条件をもっているとみなすことができる。

そこで、最初の中国における銀貨と銅貨の事例に戻ってみよう。第二章、第四章でふれるように、中国は銅銭という小額貨幣に古くから依存した社会である。また同時に、